7.「欧州系ブドウに夢をかける」

増子　拓也（平成25年度 研究科卒）

就農年	平成28年
就農地	福島県東白川郡矢祭町
主な作物	ブドウ

【欧州系ブドウ栽培に夢をかける】

研修中から準備を進め2年生の苗を植えました。

増子君は、茨城県との県境に近い福島県矢祭町出身です。お祖父さんが水稲、畑作と繁殖和牛の複合経営を営み、農外勤務の両親が休日に手伝うと言った、典型的な兼業農家に生まれ育ちました。

越境して入学した茨城県立大子清流高校での、農業基礎の実習や授業を通して農業の楽しさに目覚め、将来農業をやりたいと思い立ちました。何もない畑に自分で種をまいた作物が、手をかければかけるほど立派に育っていく楽しさに夢中になって取り組みました。自分で農業経営をやると考えたときに、山間地の小規模な水田と畑で高収益をあげられる作物は何か？その時、オープンキャンパスで訪れた茨城県立農業大学校で見た欧州系ブドウ栽培ならば、小面積でも取り組め、自分でもできるのではないか？と思い、茨城県立農業大学校農学科に進学し、果樹コースで学びました。農学科の2年間で果樹栽培の基礎をマスターすると、さらに研究科に進み、「摘芯の仕方が果実の品質に及ぼす影響について」を研究テーマに勉強しました。

【研修先で経営を意識することを学ぶ】

果樹栽培が殆ど立地していない地元に帰って就農し、ゼロからぶどう栽培を始めるためには、さらに先進地で実際の農作業をひととおり経験し、師匠として就農後もアドバイスや情報をもらえる人との繋がりを築く必要性を感じ、卒業後は石岡市の直売所を有する大規模なぶどう園で2年間研修することを決めました。

ここで増子君は、雨よけ栽培のビニール張りから始まって、剪定、摘芯、房作り、収穫、そして販売など、ぶどう栽培に関するありとあらゆることを経験することができました。また、若い担い手の育成に熱心な経営者から、折に触れ「経営」というものを常に意識するよう助言を受けました。直売所での販売では、季節によるお客の流れや需要の波など、現場でしか解らないことを経験し、大いに勉強になりました。

【ブドウ栽培を開始】

これらの経験を糧に、満を持して平成28年4月、矢祭町で祖父の所有する17㌃の畑に雨よけハウスを建設し、シャインマスカットを中心に10種類36本の苗木を植え、ぶどう栽培をスタートしました。苗木は少しでも早く収穫できるよう、1年前から準備した2年生苗を植えました。研修先の石岡市より季候が冷涼な福島ですが、9月の中旬から10月まで、切れ目無く収穫が続くよう品種を選定しました。2年後には初収穫を迎え、5年後には軌道に乗せる予定です。

【各種支援制度を活用】

これら先進農家での研修時の費用や苗木等の準備については、青年就農給付金の準備型の制度を活用しました。また、ハウスの建築費用は、認定就農者となって制度資金を借り入れました。

家族、特に両親は、自分のやりたいことをやれ、という方針で心配しながらも温かく見守ってくれています。父親は4年後に勤め先を定年退職したら、増子君のぶどう栽培を手伝ってくれるとのことです。

販売は地域にぶどう栽培農家がいないので、近隣の道の駅や直売所などを考えています。過疎化が進む矢祭町ですが、就農計画認定などでお世話になった白河の農業改良普及センターから、地元の4Hクラブへの加入を勧められています。また、大子町周辺には高校時代の先輩など就農している人達もいるので、これらのネットワークに参加することで、農業に関する情報収集に努めるとともに、農作業のない余暇も有意義に楽しみたいと考えています。

【やらないで後悔するより、やって納得する人生を】

増子君は、施肥や剪定から始まり、多くの手間を経て作り上げるぶどう栽培では「収穫」の時の喜びは何物にも代えがたい充実感があるといいます。

増子君は、「農業を志す後輩達は、非農家であっても、少ししか土地がなくても、行政の様々な支援措置を活用して、やる気があるなら是非やった方が良い」と思っているそうです。一度しかない人生だから、やらないで後悔するよりはやってみた方が納得する、と思うからです。

房作りの作業に取り組む増子君。秋の初収穫が楽しみです。